

【11月第3週のメッセージ】

- 日時：2020年11月15日（日）
- 場所：立川教会
- 説教題：「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」
- 聖書：新約マルコによる福音書9：2-29（新p78）
- 讃美歌：242「主を待ち望む」411「うたがい迷いの」

お早うございます。

新型コロナウイルスの第3派が来ています。

コロナの問題がなければ、安心して生活し、秋の紅葉にもゆっくり心を寄せることが出来るのに、今は、感染を心配する日々を送らなければなりません。

ワクチンが出来、安全に礼拝が出来るまで、お互いに気を緩めることなく、礼拝を守ることが出来ればと思います。

それぞれが体調管理に責任をもってください、無理をすることなく、礼拝を守ることが出来ればと思います。

教会としては、すでにお知らせしましたが、以下のことを実施したいと思います。

- ・入り口で検温を行い、手指などを消毒する。
- ・帰る時にも手を消毒する。
- ・マスクの着用。
- ・讃美歌は1節のみ讃美。
- ・礼拝の前と後、教会の前の急坂の手すり、会堂内の講壇、マイク、遮蔽シール、椅子の背もたれ、集会室のテーブル、トイレなどのアルコール消毒を行うことです。

そして、何よりも、礼拝では、換気と暖房を両立させるための工夫が必要です。

まずは、皆様には屋外で行う野外礼拝と考えていただき、コートはそのまま脱がずに着ていただいて良いと思います。膝掛けもご持参下さい。

暖房も強力にし、換気も従来通り、会堂の両側の窓を開けることが出来ればと思います。

一応、そのように行いつつ、その都度、皆様とも相談して、この冬を乗り越えたいと思います。

それでは、今日与えられた聖書の御言葉から学んでまいりましょう。

今日は、二つの場面から成り立っています。

初めの場面は、山の上でイエス様の姿が変わると言う変貌の出来事であり、後の場面は、癲癩（てんかん）の発作で苦しむ子どもを持つ父親とイエス様の、病を介しての出会いの場面です。

福音書記者マルコは、この二つの出来事を記すことによって、私たちに何を伝えたかったのでしょうか？そのことをご一緒に考えてみたいと思います。

初めに山上の変貌です。

2：6日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、

3：服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。

4：エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。

5：ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を3つ建てましょう。1つはあなたのため、1つはモーセのため、もう1つはエリヤのためです。」

6：ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのがある。

7：すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」

8：弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。

イエス様は、12弟子の中でも、特に信頼するペトロとヤコブ、ヨハネを連れて山に登ります。山は、神様がその姿を現す場所でした。その時、イエス様の姿が変わるのです。「服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。」そして、目の前に旧約の時代に活躍したエリヤとモーセが現れ、イエス様と語り合っている場面が現れるのです。それを見たペトロは、思わず言葉を発します。「仮小屋を3つ建てましょう。1つはあなたのため、1つはモーセのため、もう1つはエリヤのため」と。

しかし、5節のこの言葉ですが、ペトロは、自分が何を言っているのか分かっていませんでした。今日の前で起きている出来事への驚きと恐れから、ただ、咄嗟に口に出た言葉でした。

「仮小屋」と訳されていますが、原語をそのままに訳せば休息用の「テント」です。モーセとエリヤとイエス様に休んでいただきたい。そのための場所を用意したい。誰に聞かれた訳でもなく、ただそれだけがペトロの口から出た言葉でした。

この3人が何を話していたのかについて、マルコは触れていません。しかし、同じ場面を記したルカは、ここで何が語られたかについて触れています。ルカによる福音書第9章28節から31節まで、新共同訳聖書123頁です。

28：この話をしてから8日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。

29：祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。

30：見ると、2人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。

31：2人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。

即ち、3人のこの話し合いは、モーセによって代表される律法と、エリヤによって代表される預言が、イエス様の十字架によって成就し、完成することでした。律法は、神様から与えられた戒めです。律法を貫いているのは、神様の愛です。預言は、神様が私たちに送って下さる救い主の約束です。預言を貫いているのは、律法と同じく、私たちに対する神様の愛です。そして、この愛は、イエス様の十字架と復活によって成就し、完成する。それが、この山上での3人の語らいの意味するところでした。

モーセとエリヤとの語らいによって今一度ご自分の使命について確かめられたイエス様は、山を下ります。

続いて、山を下りながらの話しです。

9：一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。

10：彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

11：そして、イエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。

12：イエスは言われた。「確かに、まずエリヤが来て、すべてを元どおりにする。それなら、人の子は苦しみを重ね、辱めを受けると聖書に書いてあるのはなぜか。

13：しかし、言うておく。エリヤは来たが、彼について聖書に書いてあるように、人々は好きなようにあしらったのである。

復活について、イエス様と弟子たちとの会話が記されています。

しかし、弟子たちは、これから起こる復活について理解することが出来ません。

論議が進まない中で、彼らは、エリヤについての話しに話題を変えます。

それに対し、イエス様は、エリヤはすでに到来した、それはバプテスマのヨハネであり、人々は彼を好きなようにあしらい、葬り去ったと語りました。

そして、山を下りた時、そこでは、山上の光景とは全く違ったこの世の現実がイエス様を待ち受けていました。信仰とは対極の不信仰が渦巻く現実でした。

場面は、癲癇（てんかん）の病を負った子どもの現実から始まります。

当時の社会では、病は悪霊の仕業によるものと理解されていました。

マルコは、この悪霊とイエス様との戦いを記します。

そして、信仰と不信仰との問題を私たちに問うのです。

14：一同がほかの弟子たちのところに来てみると、彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していた。

15：群衆は皆、イエスを見つけて非常に驚き、駆け寄って来て挨拶した。

イエス様が、どれだけ人々から信頼され、慕われているかをマルコは記しています。

16：イエスが、「何を議論しているのか」とお尋ねになると、

17：群衆の中のある者が答えた。「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません。」

18：霊がこの子に取りつくると、所かまわず地面に引き倒すのです。すると、この子は口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してくださいようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした。

19：イエスはお答えになった。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところ連れて来なさい。」

20：人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。

ご存知の方がいると思います。

私も教員時代に、癲癇の発作がある生徒を持っていました。

いつ起きるか全く分からない発作が起こると、本当に大変です。

教師である私でさえ、心が強く痛むのに、ましてその親たちの心の嘆きはどれほどのものかと思います。

一例ですが、複数の学校によって行われる連合運動会の選手選びの時に、足の速いその生徒を選手に選ぶかどうか、教師たちは何度も話し合いました。走っている途中で発作が起きた時の危険性を考えると、とても選手に選ぶことは出来ませんでした。

しかし、選手に選ばれれば、彼にとっては、一生に一度あるかないかの栄光ある舞台です。保護者とも話し合い、彼の希望を聞き、そして発作を抑える薬もしっかり飲ませ、100mの短距離の選手として送り出しました。

見事に、彼は1番でテープを切りました。彼のその喜びは、たとえようもないものでした。連合運動会と言う晴れの舞台での1位です。一生に一度の栄誉だったかも知れません。

しかし、スタートからゴールまで、私たちは万が一に備えて、いつでも飛び出せるように準備をし、祈るような思いで彼の走りを見つめていたあの時の緊張を覚えています。

この場面では、イエス様を見ると、悪霊は、自分の力を見せつけようとして、子どもを引き付けさせます。この「引きつける」という言葉の原語は、「体をばらばらにさせる」ことです。それほどの強さをもって、悪霊は力を誇示しました。

21：イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。」

22：霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」

父親の本音です。

「おできになるなら・・・」

この言葉には、この病に疲れ果て、絶望しきっている親の気持が出ています。

もう、疲れたのです。

これまで、どれだけこの病を癒してもらおうように、あちこちを尋ね、走り回ったことか。

しかし、誰もこの病を治すことは出来ませんでした。

そして、最後の頼みとして、イエス様の弟子たちのもとに来たのです。

でも、ダメでした。

それどころか、その師であるイエス様が現れても、子どもを苦しめている霊は、自分の力を見せつけるために、暴れ回り、子どもを苦しめている。

イエス様、私はもう疲れしました。それでも、もしお出来になるなら、私どもを憐れんで、この子を助けて下さい。

父親は、やっとの思いでイエス様にそう話しました。

その言葉に対し、イエス様が返した言葉は、父親をして慄然とさせるものでした。

23：イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」

父親の挫折や失望、激しい心の痛み、それらを全て受け止めた上で、イエス様が返された言葉は厳しく、曖昧さを許さないものでした。

あなたは、この私を信じるのかと。

私に、悪霊を追い出し、子どもの病を癒す力が神様から与えられていることを信じるのかと。

そして、この一言によって、父親の不信は消し去ります。

24：その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」

「もしお出来になるなら」と言う父親の言葉は、重たい内容を持っています。

まさに、私たちの信仰を厳しく問う言葉でもあります。

「もしお出来になるなら・・・」

出来るか出来ないか分からない。もし出来なかったとしても、諦める以外にない。

父親は、癒されない時に備えて心の準備をしていました。

それが「もしお出来になるなら・・・」との言葉です。

今日与えられた聖書の箇所のもっとも重要な場面がここです。

「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」

「信じます。不信仰なわたしをおゆるしてください。」

マルコがここで記している子どもの病いとは、私たちが日々直面する人生の課題と考えることが出来ます。

ただの課題ではありません。

より困難な課題です。

そのような課題に直面した時、私たちはイエス様に目を向けます。

そして祈ります、助けて下さいと。

その時、私たちは、目の前の困難な課題を克服する力がイエス様から与えられることを信じて祈っているのか、それとも半信半疑で祈っているのかと言うことです。

信仰とは何でしょうか。私たちは、一体何を信じて今を生きているのでしょうか。

そして、イエス様は、父親の何を良しとして願いを聞き入れたのでしょうか？

それは、父親がイエス様を信じたからです。

その信仰は、何よりもその耐え難い苦しみから子どもを解放したい子どもへの愛によって、彼の内から引き出されたものでした。



信仰は、観念ではなく、実存です。

頭で考えるものではなく、実際にこの身に起こるものです。

その信仰を、イエス様は受け入れました。

信じる者は、何でも出来る。

頭ではなく、この身を掛けて信じる時、祈りは聞かれます。

それは、激しいものではなく、静かなものです。

日常生活の中で、神様を信じ、イエス様の臨在を覚えて生きる時、私たちは神様の守りの中に置かれています。

最後の場面です。

25：イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものも言わず、耳も聞こえさせない霊、わたしの命令だ。この子から出て行け。2度とこの子の中に入るな。」

26：すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけさせて出て行った。その子は死んだようになったので、多くの者が、「死んでしまった」と言った。

27：しかし、イエスが手を取って起こされると、立ち上がった。

28：イエスが家の中に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。

29：イエスは、「この種のもの、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」と言われた。

今、私たちが直面しているコロナの問題、それはこの子どもと同じで、まさに私たちに突き付けられている困難な課題と言えると思います。

この課題を前にして、私たちが信仰をもってイエス様に向き合うとはどのようなことかを考えるのです。

そして、最後の29節の「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできない」と言うイエス様の言葉を、今日私たちに与えられた御言葉として心に覚え、このコロナの時代を生きて行きたいと思います。

祈りましょう。